

学校統廃合における教師の「感情」 : 長崎県立高校 教員を対象として

畑中, 大路
山口東京理科大学工学部 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1498391>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 17, pp.87-92, 2015-03. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)教育経営学研究室/教育法制論研究室
バージョン :
権利関係 :

学校統廃合における教師の「感情」 —長崎県立高校教員を対象として—

畑中 大路
(山口東京理科大学／助教)

- I はじめに
- II 研究対象および分析視座
- III 調査結果
- IV おわりに

I はじめに

少子化及び人口減少社会をむかえた現在、「学校規模適正化」を謳い全国各地で学校統廃合がなされている。この「学校規模適正化」および学校統廃合は研究上も注目を集めるトピックであり、多くの研究蓄積がなされている。

先行研究を概観すると、二つの方向性を看取できる。一つは、「学校規模適正化」論争がいかんにして起こり、また学校統廃合が進行する要因等は何であるかについて、事例をもとに詳述した研究である(井口 2004、葉養・西村 2009、屋敷 2003、若林 1999、等)。学校統廃合は多くの場合、児童・生徒数の現状や将来予測、当該地域の経済状況等を勘案し、「全体最適」を志向して行われるものである。しかし学校には、児童・生徒や保護者、地域住民、卒業生など様々なステイクホルダーが存在し、そこには「全体最適」では収集がつかない多様な「感情」が存在する。それゆえ、一つの学校が統廃合されるプロセスは必ずしも単純なものではなく、様々な思いが折り重なり複雑な様相を描く。

二つは、学校統廃合によって生じる影響や課題について記述・分析したものである。例えば浅川(2012)や貞広(2007)は、学校統廃合がその当事者である生徒に対しどのような影響をあたえる(た)のかについて、生活意識や通学距離等の側面から考察している。また、西村(2012)や株式会社リベルタス・コンサルティング(2011)は地域住民等の意識に着目し、その変容の様子を報告している。

上述のように、先行研究の多くは、学校統廃合をめぐる当事者やステイクホルダーを取り上げた

うえで、彼/彼女らへ与える影響等を示し、今後の統廃合実施へ資するエビデンスを提示するものが多い。

しかし、かかる先行研究では見落とされている対象がある。それは教師の「感情」である。先行研究からも読み取れるように、学校統廃合においては、児童・生徒や保護者、地域住民、OB・OG等の様々な「感情」が渦巻く。その中で教育活動を行う教師も様々な「感情」を抱くであろうことは容易に想像がつくが、その様相は未だ十分に考察されていない。

労働における「感情」に照射する感情社会学は(Hockshield 1983=2000)近年、教育領域においても着目されつつある。例えば日本教育経営学会研究推進委員会では、1990年代後半から断続的に続く教育改革が、教師の「感情」に与える影響について検討している(金川 2011等)。また、黒羽・黒羽(2011)は、教師が選択する教育実践戦略としての「感情」に着目している。このように、教師の「感情」を従属変数、独立変数として扱い(榊原 2011)、当該事象の内実に向ける研究が徐々に増加している。この「感情」という視座は、当事者の様々な「感情」が渦巻き折り重なる学校統廃合を分析するうえでも、活用可能なものと予想される。

以上を踏まえ本稿では、学校統廃合に直面した教師の「感情」に着目した分析を試みる。以下では、本稿の調査対象及び分析視座を確認し(II)、学校統廃合を経験した教員に対し行ったインタビュー調査結果、および各種資料を参照しながら、統廃合をめぐる教師の「感情」について探索的に検討する(III)。

II 研究対象および分析視座

1. 研究対象

本稿では、2000 年前半から続く「長崎県立高校再編」を分析対象とする。

長崎県は九州の中でも人口減少率が著しく、生徒数も 1964 年をピークに減少し続けている。長崎県ではこの生徒数減に対し、「学級減」による対応を取ってきた。しかし今後更なる生徒減少期を迎えるに当たり、これ以上の学級減を続けると「学校行事や部活動など魅力的で活力ある教育が行いにくい状況になる」、「教科・科目の開設に制限が加わり多様な学習要望や進路希望に対応できにくくなる」(長崎県教育委員会 2001:23)と懸念し、県立学校・学科の適正配置が検討され始めた。この再編基準としては、「1 学年 4～8 学級 (160～320 人)」という数値が示されている。

上記計画のもと具体的な再編対象が示されたのが、「長崎県立高等学校教育改革第 2 次実施計画」(2003 年 4 月 17 日)および「長崎県立高等学校教育改革第 4 次実施計画」(2008 年 3 月 19 日)であった。本稿はこの、第 2 次実施計画で対象となった X 高校 (2008 年 3 月閉校)、第 4 次実施計画で対象となった Y 高校 (2011 年 3 月閉校) に当時在籍した教員に対しインタビュー調査を行い、また X 高校に在籍した教員による手記を用い分析を試みる (表 1、表 2)。

表 1 インタビュー調査協力者の概要

| | 閉校時 在籍校 | 閉校時 職位 | 閉校時勤務校数 および経験年数 | 現在 |
|-----|------------|-----------|-------------------------------|--------------|
| A 氏 | X 高校 | 校長 | 7 校目 (教育委員会勤務を除く) 33 年目 | 退職 |
| B 氏 | X 高校 | 教諭 | 2 校目 14 年目 | K 高校 教諭 |
| C 氏 | Y 高校 | 養護教諭 | 2 校目 7 年目 | O 高校 養護教諭 |

表 2 資料における分析対象の概要⁽¹⁾

| | 在籍校 | 在籍時 職位 | X 高校在籍期間 |
|-----|------|-----------|-------------|
| D 氏 | X 高校 | 教頭 | 2004～2007 年 |
| E 氏 | | 教諭 | 2003～2008 年 |
| F 氏 | | 教諭 | 1990～2006 年 |
| G 氏 | | 教諭 | 2005～2008 年 |

2. 閉校決定までの変遷—X 高校の場合

本稿で取り上げる X 高校・Y 高校はいずれも、長崎県郡部に位置する小規模校であり、近隣に普通科高校がある学校であった。このうち X 高校は、「様々な事情」を抱えた生徒を受け入れる学校としての性格も持ち合わせていた。

X 高校には中学時代に不登校だったり、人間関係や学習面でつまづいた生徒も少なくありません。けれども三年間の高校生活の中で、自己を再認識し自信を取り戻し卒業していく生徒もたくさんいます。(X 高校同窓会長による、長崎新聞「みんなのひろば」

2003 年 4 月 28 日への寄稿より抜粋)

それゆえ X 高校の閉校をめぐるのは、保護者や OB・OG を中心とした議論が過熱することとなる⁽²⁾。

2003 年 1 月、長崎県教育委員会によって発表された X 高校を含む七つの県立高校の統廃合方針を受け、X 高校の PTA や OB・OG を中心とした組織「X 高校を守る会」(以下、「守る会」と略記)が発足する。2003 年 4 月 17 日には定例県教育委員会において閉校の決定がなされるが⁽³⁾、「守る会」はこの決定を受け、県内各地で存続運動を続けるとともに、反対署名を集め始める。そして「守る会」は約 37,000 名の署名を集め、X 高校の閉校時期再検討に関する請願書を県議会へ提出した。しかし長崎県議会文教委員会は請願を採択せず、この段階で X 高校の閉校は完全に決定することとなる (2003 年 7 月 3 日)。

上述のような動きがあった 2003 年度、X 高校に新任校長として赴任した A 氏は、当時の様子を以下のように記している。

「赴任からの一年間はこのような閉校問題に明け暮れた感がある。存続を求める意見に対し一定の理解や感謝の意を表しながら、挨拶や会話においては県立学校長としての立場を堅持するという、心苦しい場面もあった。」(A 氏 2006)

上述した X 高校における閉校決定の過程からは、生徒、保護者、地域住民、OB・OG 等の様々な「感情」が衝突する様子が看取できる。加えて、教師も少なからずその衝突の渦に巻き込まれていることが A 氏の手記から読み取れよう。

このように、閉校をめくり様々な「感情」が渦巻く中で教育活動を行う教師は、具体的にいかなる「感情」を抱いたのであろうか。これは換言するならば、学校統廃合における従属変数としての「感情」の考察として位置付けることができる。

3. 調査手続き

調査を行うに当たってはまず、長崎県立K高等学校長であるZ氏へ本研究の意図を説明し、Z氏を介して表1の3名を紹介いただいた。

各調査協力者へのインタビュー調査時間はそれぞれ約1時間、調査場所は学校会議室や教室、長崎県内の飲食店を利用した。調査は、①「これまでの教職経験」、②「閉校当時の様子・特徴(生徒、保護者、地域など)」、③「閉校を知った際、どのような思いを抱き、生徒や保護者、地域住民にどのように対応したか」の3点を中心に尋ねる半構造化形式で行った。

ただし本調査は試行的取り組みであることから、十分な調査協力者数を確保できていない。そこで調査協力者の不足に関しては、調査時に入手した『X高校閉校記念誌』および「X高校PTAだより」で補い、特に表2に記載した4名の教師による手記を活用した。

4. 分析視座

本調査は、「閉校をめぐる様々な感情が渦巻く中で働く教師は、いかなる「感情」を抱くのか」をリサーチクエスチョンとして設定し行うものであるが、学校統廃合で生じる「感情」には様々なものが想定しうる。この点について、組織マネジメントにおける「感情」について考察した金井・高橋(2008)は、「感情のマネジメントを考える際にも、出発点としては「喜・悲・恐・怒・驚・嫌」を中心に考えていくのがよい」(金井・高橋2008:7)と述べている。試行的取り組みである本調査もひとまず上記視座を採用し、教師が抱く「感情」の読み取りを行うこととする。

Ⅲ 調査結果

1. インタビュー結果の分析

以下では、インタビュー調査結果を用いた分析を試みる。まず、主たる質問「閉校を知った際、

どのような思いを抱き、生徒や保護者、地域住民にどのように対応したか」へのA氏・B氏・C氏の回答の一部を以下に列記する。

A氏: その時に、全職員に言ったことは、「ここは県立高校だ」と。「設置者は県教委だ」と。だから、県教委が県全体のことを考えて、少子化のことを考えて、すべてを考えた最終的に閉校すると、もし決めたのであったら、従うしかないじゃないかと。私は、淡々として従うんだと。

ただ、残せるものなら残してもらいたいとか、そういう気持ちとは別だけど、少なくとも、決まりましたとなれば、淡々として、立派な学校のままといいますか、立派な学校にして終わりたいと。そういうことを最初に言いました。(2014.10.24)⁽⁴⁾

B氏: (閉校した年は)3年生だけでしたね。教員もだいぶ減って、もう、いろんな荷物を片づける。事務の先生たちの分もありつつ。…難しいですね、同時並行で、いろいろ。やっぱり、生徒も寂しいだろうし。でも、最後1年、3年生しかいなかったけど、文化祭を盛り上げようって言って、生徒会役員みんなで色々な企画をして、楽しかった。紅白歌合戦したり。速飲み競争したり。今までにないようなことに全部チャレンジして。楽しかったですね。

(2014.10.23)

C氏: …生徒はどこにでもいるから。確かに、昔のことに、感傷に浸りたくもなるけど、今、目の前にいる生徒がね、助けを求めたりとかしているの。目の前に向かっていくしかないのかなっていう。(2014.10.24)

閉校決定時にX高校校長であったA氏は、生徒・保護者・PTA・地域住民への対応に加え、管理職としてX高校教師への説明も行わなければならないという難しい立場にあった。よってA氏の語りからは、一教師でありかつ校長という立場ゆえ生じる、「悲」や「嫌」という複雑な「感情」の存在が読み取れる。

X高校に教諭として在籍したB氏も、A氏同様、閉校に対する悲しみや寂しさを抱いている。しかし一方で、閉校という現実を受け入れ教育活動にあたる中で、生徒との間に「喜」に似た感情が芽生えた様子も同時に窺える。

Y高校に勤務したC氏は、養護教諭という立場上、周囲の教師とは異なる視点で生徒の様子や心の悩みに寄り添っていた⁽⁵⁾。そのC氏もやはり、閉校に対する「悲」という「感情」を抱きつつも、一方でその悲しみの「感情」からは、諦めにも似た複雑な様相が看取できる。

2. 各種資料からの分析

以下ではインタビュー調査結果の分析を補足すべく、『X高校閉校記念誌』、「X高校PTAだより」のうち、特に表2に記載した4名の教師の手記をもとに「感情」の読み取りを試みる。

D氏：閉校を例えれば、住み慣れた実家が無くなるようなものであるから、生徒にはさぞや悲しいことだろうと思っていたが、「私にとってはX高校で生活している今が大切です」と、言う生徒に接し、頼もしく感じた。
(『X高校閉校記念誌』p. 69)

E氏：高校の閉校というのは、これから高校進学を考える生徒にとっては選択肢が減るだけの話かもしれませんが、しかし、卒業生の皆様方にとっては母校が無くなるという重大事だと思います。X高校の場合は特に、多くの卒業生が訪れる学校だけになおさらです。(『X高校閉校記念誌』p. 73)

F氏：三年前には、本校の廃校問題が突然浮上しました。
教職員は突然の難問題に困惑し、途方にくれました。
(「X高校PTAだより」2006年、p. 3)

G氏：これまで3学年担任を経験したことが無く、この閉校という大切な行事をひかえ、閉校することに対する悲しさや悔しさ、3学年担任として不安や喜びの気持ちが入り交じり、複雑な心境で最後の1年間を過ごして

きました。(『X高校閉校記念誌』p. 74)

手記という性格上、その本意を知ることは困難である。しかしそれでもなお、上記記述からは、閉校に直面した教師が抱く多様な「感情」を垣間見ることができる。

D氏の手記からは、統廃合を契機として生じた「恐」やそれに伴う「驚」とともに、前述したB氏同様、「喜」の「感情」を読み取ることができる。一方、E氏やF氏の手記からは、閉校への戸惑いとともに、その事態への「悲」という「感情」、そしてこれまでの卒業生への配慮や統廃合という選択を取らざるを得ない現実への「怒」を読み取ることができる。またG氏の手記からは、初めての3学年担任への期待や不安に閉校という事実が重なり、「喜」や「悲」、「嫌」という様々な「感情」が織りなす様相が看取できる。

3. 小括

3名の調査協力者へのインタビュー調査、および各種資料をもとに試行的な分析を行った結果、閉校に直面した教師の様々な「感情」の様相が看取できた。これはすなわち、学校統廃合に関する従属変数としての教師の「感情」の存在を示すものといえる。

そしてここで、二つの新たな問いが浮上する。一つは、「従属変数」として生じた「感情」を、教師はいかにしてコントロールしているのかという問いである。これは「組織のなかに遍在する感情の問題について、人は感情をどのようにマネジメント（管理）する必要があるのか」（金井・高橋2008:5）という、「感情管理」への着目である。

もう一つは、学校統廃合における従属変数としての「感情」が存在するのであれば、「独立変数」としての「感情」も存在しうるのかという問いである。例えば黒羽・黒羽（2011）は、教師が自己の感情を「戦略的行為」として操作し、教育活動にあたる様子を考察している。ステイクホルダーの様々な「感情」が渦巻く学校統廃合においても同様に、教師は自身の「感情」を操作し、「戦略的行為」にまで仕立て上げることが可能なのだろうか。

本稿では調査設計の限界上、上記二点について考察することはできない。しかし今後、人口減少

の進展に伴った更なる高校再編が想定されることから⁽⁶⁾、学校統廃合における教師の「感情」は検討を加えるべきテーマであると言えよう。

IV おわりに

本稿では、学校統廃合における教師の「感情」に着目し検討を行った。その結果、閉校を意識しながら教育活動を行う教師が抱く様々な「感情」の様相を窺い知れた。しかし、本調査は試行的なものであり、課題も多い。以下、本稿の課題を4点述べ、稿を閉じたい。

1点目の課題は調査対象選定の困難性である。今回は長崎県を対象に調査を行ったが、長崎県では戦後から現在に至るまで、閉校した高校数は少なく、十分な調査対象数を確保するのが困難である。もちろん、調査対象を全国へと拡大するのであれば数の確保はできるであろうが、それとともに対象の幅も広がり、統廃合の背景や文脈も多様になる。よっていずれにせよ、対象選定に慎重にならざるをえないことは変わらない。

2点目は1点目の課題に派生するものであるが、調査対象の少なさゆえ対象の特定が容易になり、調査自体が困難になる点である。学校統廃合における教師の「感情」は非常にセンシティブな内容であり、調査意図の説明・了解は必須である。今回は高校校長であるZ氏を介した調査依頼が可能であり比較的スムーズに調査を行うことができたが、今後同様の調査を行ううえでは協力者とのラポール構築が必要となる。また同時に、データ収集後においても、倫理上の配慮や確認が不可欠であることは論を俟たない。

3点目は知見の一般化についてである。本稿で示したように、学校統廃合の「従属変数」としての教師の「感情」には様々なものがある。また、その「感情」にも、当該学校への在籍年数や職位、出身地(校)等により温度差があることも想定される。一般化可能な知見産出の可否については検討の余地がある。

4点目は調査の実施時期に関してである。今回は、閉校から6年が経過したX高校と、3年が経過したY高校に勤務した教員へ調査を行ったが、すでに記憶は薄れがちになっていた。しかしセンシティブな内容であるため、閉校直前・直後では

調査自体が困難であろう。それゆえ、どのタイミングで調査を行うことが妥当であるのか、他の課題と合わせて検討する必要がある。

【注】

- (1)『X高校閉校記念誌』における「旧職員一覧」(pp. 81-82)をもとに作成。
- (2)これは近年の義務制学校の統廃合において、「紛争」が減少しつつあると報告した新藤(2014)とは異なる傾向であるといえる。
- (3)この定例教育委員会は荒れた様子であったことが当時の新聞記事から窺える。(「傍聴席に飛び交う怒号 一方的な決定許せぬ 教育の機会均等奪う 結論ありきの委員会」(2003年4月18日長崎新聞24面見出し))
- (4)調査結果への下線は筆者による。また、インタビュー末の()は調査実施日をさす。以下同様。
- (5)Y高校では生徒が頻繁に保健室に訪れ、C氏へ不安や悩みを打ち明けていたという。
C氏：保健室の利用は多かったですね。他の先生たちも、保健室に期待しているところっていったら「そういう子供たちの受け皿に」みたいところがあって。生徒たちには、やっぱりここ(=保健室)しかないんだよなって。家庭的にも大変だし、愛情不足の子たちも結構多くてですね。
(214. 10. 24)
- (6)例えば、本稿が対象とする長崎県においても、「複数の学校を統合するなどして適正な学校規模に近づけることとし、対象校や実施時期、学校の形態などを含め、今後具体的な計画を策定し再編整備を図る」(長崎県教育委員会 2009: 14)との新たな方針が提示されている。

【引用・参考文献】

- ・浅川和幸(2012)「学校統廃合による中学生の生活と意識の変化—北海道旧産炭地A中学校を事例に—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』

- 第 117 号、pp. 1-31。
- ・井口均 (2004) 「小学校統廃合の背景とそれがもたらすもの—長崎県西彼杵郡 S 町立 4 小学校の統廃合案検討のケースから—」『長崎大学教育学部紀要 教育科学』第 66 号、pp. 41-56。
 - ・臼井智美 (2012) 「教職員の感情の生成とゆらぎ」『日本教育経営学会紀要』第 54 号、pp. 129-136。
 - ・加藤崇英 (2012) 「討論のまとめ」『日本教育経営学会紀要』第 54 号、pp. 142-145。
 - ・加藤崇英 (2013) 「学校経営と教職員の感情」『日本教育経営学会紀要』第 55 号、pp. 137-142。
 - ・金井壽宏・高橋潔 (2008) 「組織理論における感情の意義」『組織科学』第 41 巻第 4 号、pp. 4-15。
 - ・金川舞貴子 (2011) 「学校組織と教職員の感情」『日本教育経営学会紀要』第 53 号、pp. 159-165。
 - ・雲尾周 (2012) 「教育改革と教職員の感情」『日本教育経営学会紀要』第 54 号、pp. 124-128。
 - ・黒羽正見・黒羽諒 (2011) 「教師の教育行為に現出する「感情労働」に関する一考察—ある小学校教師の戦略的行為に着目して—」『群馬大学教育実践研究』第 28 号、pp. 319-326。
 - ・柳原禎宏 (2011) 「討論のまとめ」『日本教育経営学会紀要』第 53 号、pp. 165-168。
 - ・貞広斎子 (2007) 「通学距離基準からみた公立小中学校の配置状況に関する研究」『千葉大学教育学部研究紀要』第 55 巻、pp. 37-42。
 - ・新藤慶 (2014) 「「平成の大合併」と学校統廃合の関連—小学校統廃合の事例分析を通して—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第 63 巻、pp. 99-115。
 - ・末松裕基 (2012) 「教職員の感情と学校組織」『日本教育経営学会紀要』第 54 号、pp. 136-142。
 - ・笠沙知章 (2013) 「教職員の感情に関する 2 事例校の比較分析」『日本教育経営学会紀要』第 55 号、pp. 132-136。
 - ・西村吉弘 (2012) 「学校統廃合における地域住民への統合効果に関する考察」『国立教育政策研究所紀要』第 141 集、pp. 137-151。
 - ・葉養正明・西村吉弘 (2009) 「就学人口減少地域における小規模小学校の持続条件と統合条件—東北地方 2 地域の事例研究を通して—」『国立教育政策研究所紀要』第 138 集、pp. 109-124。
 - ・平林茂 (2011) 「学校現場の変容と教職員の感情—実践的な立場からの報告—」『日本教育経営学会紀要』第 53 号、pp. 154-158。
 - ・水本徳明 (2013) 「理論的総括」『日本教育経営学会紀要』第 55 号、pp. 143-148。
 - ・屋敷和佳 (2003) 『学校統合および学校選択制導入に伴う教育環境の充実と課題に関する研究』平成 13~14 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 報告書。
 - ・若林敬子 (1999) 『学校統廃合の社会学的研究』御茶の水書房。
 - ・Hochschild, A. R. (1983) *The Management Heart: Commercialization of Human Feeling*, The University of California Press. (石川准・室伏亜希 (訳) (2000) 『管理される心 感情が商品になるとき』世界思想社。)
 - ・株式会社リベルタス・コンサルティング (2011) 『小・中学校の設置運営に関する事例研究～公立小・中学校統合事例集～』。
 - ・A 氏 (2006) 「悲しきカウントダウン」『長崎県校長会誌』pp. 6-7。
 - ・長崎県教育委員会 (2001) 「長崎県立高等学校改革基本方針」2 月 20 日。
 - ・長崎県教育委員会 (2003) 「長崎県立高等学校教育改革第 2 次実施計画」4 月 17 日。
 - ・長崎県教育委員会 (2008) 「長崎県立高等学校教育改革第 4 次実施計画」3 月 19 日。
 - ・長崎県教育委員会 (2009) 「第二期長崎県立高等学校改革基本方針」
 - ・長崎県立長崎 X 高等学校 (2008) 『X 高校閉校記念誌』。
 - ・長崎県立長崎 X 高等学校 P T A (2006) 「P T A だより」3 月 1 日。
- <追記>
- 本稿は、九州教育学会第 66 回大会ラウンドテーブル (於:長崎大学) 「九州地区における学校規模適正化をめぐる問題状況と課題をさぐる(その 2) ~長崎県の現状報告と研究方法論の検討」での報告をもとに執筆したものである。
- <謝辞>
- 本稿の作成にあたり多大なご協力をいただいた先生方に心よりお礼申し上げます。